

韓国語を母語とする日本語学習者における 統語的複合動詞の習得

一	瀬	陽	子*
木	戸	康	人**
團	迫	雅	彦***

1. はじめに

動詞の意味を理解することは何を意味するのであろうか。動詞の役割はある事象の一部を切り取って言い表すことである。例えば、単純動詞「切る」の意味は「繋がっているものを断つこと」である。換言すると、「切る」はどのように対象物を断ったのかについては何も言及していない。例えば、「切る」ことを始めたことを表したいのであれば、「切り始める」になり、また、「切る」ことを続けたことを表したいのであれば、「切り続ける」となる。このように、日本語の場合、「切る」のような動作動詞が表す事象のアスペクトまでを事象の一部として切り取る場合は、V1（前項動詞）を連用形にして、それにアスペクトを表す V2（後項動詞）を付け加える。そうすることで、単純動詞ではなく複合動詞として表現する。複合動詞を用いて、単純動詞よりも具体的に事象を表現する言語は日本語だけではない。韓国語や中国語のようなアジアの諸言語では複合動詞が観察される（影山 2013）。ところが、日本語の複合動詞と

* 福岡大学人文学部准教授

** 神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期 2 年

*** 九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

韓国語や中国語の複合動詞の語形成方法などが異なることは多くの研究者によって指摘されている (Huang 1992, 塚本 2012 等)。では、ある言語の母語話者が他の言語の複合動詞を習得する際に、母語の複合動詞に関する知識を参照することはあるのだろうか。その場合、語形成方法などの言語間で異なる部分があることが習得に対してどのような影響をもたらすのだろうか。

本稿の目的は、主に以下に示す二点を明らかにすることである。第一に、膠着語という点で共通している日本語と韓国語において、韓国語を母語とする日本語学習者にとって複合動詞の語形成方法の差異が、日本語の複合動詞の習得に影響を及ぼすのかどうかを調査し、検討することである。第二に、動詞の自他交替に関して、単純動詞で用いられる場合と複合動詞で用いられる場合とで、学習者にとって動詞の意味の解釈に異なる振る舞いが見られるのかどうかを調査し、検討することである。

本稿の構成は以下の通りである。第二節では、日本語と韓国語における複合動詞の語形成方法の差異を示すために、主に影山 (1993, 2013) と塚本 (2012) を概観する。第三節では、統語的複合動詞に関する第二言語習得研究について概観する。特に、陳 (2010) と白 (2005) が報告するように、日本語学習者が、頻繁に複合動詞の V2 の自他を誤用することを概観する。第四節では、先行研究から導き出される研究課題を提示し、第五節と第六節で、本研究で行った調査結果を報告する。第七節では調査結果に対する考察を行う。最後に第八節で、今後の研究課題を提示することで結びに変える。

2. 複合動詞の語形成

2.1. 日本語の統語的複合動詞と語彙的複合動詞

影山 (1993) 以来、(1) に示すように、日本語における複合動詞 (前項動詞 (V1) + 後項動詞 (V2)) は、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分類される (影山 2013 : 3-4)。

(1) a. 語彙的複合動詞

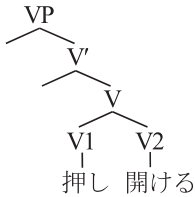
V2 が直接、V1 の連用形に結合する。すなわち、2つの語彙範疇が直接的に複合である（原文ママ）という点で「語彙的」である。

b. 統語的複合動詞

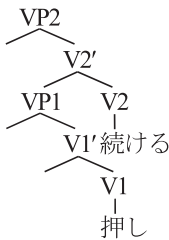
V2 は、直接、V1 の連用形に付くのではなく、V1 を主要部とする補文（幾つかのレベルの動詞句）を取る。すなわち統語的な句に付くという点で「統語的」である。

これらは、(2) のように図示される。(1a) は (2a) に、(1b) は (2b) に対応している。

(2) a. 日本語の語彙的複合動詞（cf. Saito2013）



b. 日本語の統語的複合動詞（影山 1993）



(2a) で示している「押し開ける」は、V2「開ける」が直接、V1「押す」の連

用形「押し」と併合している。つまり、「押す」と「開ける」という2つの語彙範疇が直接的に複合している点で、「押し開ける」は語彙的複合動詞である。一方、(2b)で示した「押し続ける」の場合、V2「続ける」が、直接、V1「押す」の連用形「押し」に付くのではなく、V1「押す」を主要部とする最大投射のVP1を補部取る。つまり、V1とV2の間に階層がある点で、「押し続ける」は統語的複合動詞である。

では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞はどのようにして見分けられるのだろうか。影山(1993)は複数の統語テストを行うことで語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別している。例えば、(3)に示すように、VPもしくはV'を代用形「そうする」に置換する代用形置換テストがある。

- (3) a. *太郎が扉を押し開けた。そして、花子もそうし開けた。
b. 太郎が扉を押し続けた。そして、花子もそうし続けた。

(3a)では、語彙的複合動詞「押し開ける」におけるV1を代用形に置換すると、非文法的になるのに対して、(3b)では、(3a)に示した語彙的複合動詞とは異なり、V1「押し」を代用形「そうし」に置換したとしても、文法的であることが示されている。これは統語的複合動詞におけるV1がVPもしくはV'を持つことを裏付けると同時に、統語的複合動詞の構造が少なくとも語彙的複合動詞のそれとは異なることを示している。

以上、日本語の語彙的複合動詞と統語的複合動詞について概観した。語彙的複合動詞はV2が直接、V1の連用形に結合するのに対して、統語的複合動詞のV2は、V1を主要部とする最大投射VP1を補部取る。次節では、日本語の複合動詞と韓国語の複合動詞を比較しながら、韓国語の複合動詞の特性について概観する。

2.2. 韓国語の複合動詞

韓国語には、(4) に示すように、日本語と似た特性を持つ語彙的複合動詞が存在する（塚本 2012, 和田 2011 等）。(4) の例は、和田（2011：84）に基づく。

- (4) a. 오르내리다
olu-naylita
go.up-come.down
- b. 뛰놀다
ttwi-nolta
run-hang.out

(4a) では、V1 の語幹‘olu’に V2 が直接、併合していることが示されている。(4b) も同様に、V1 の語幹‘ttwi’に V2‘nolta’が併合している。このように、韓国語には、日本語の語彙的複合動詞と類似した複合動詞があると考えられている。

一方、韓国語には日本語と同じような統語的複合動詞がほとんどないことが知られている（塚本 2012）。塚本（2012）が示すように、日本語で統語的複合動詞によって表される事象は韓国語では異なる方法で表される。例えば、(5a) のように日本語で統語的複合動詞として表される事象の V1 を韓国語では (5b) のように、V1 を名詞化することによって表現する。

- (5) a. 太郎が弁当を食べ忘れた。
- b. 다로가 도시락을 먹는것을 잊었다
Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul ic-ess-ta¹
T-Nom lunchbox-Acc eat-Rel-NMNZ-Acc forget-Past-Decl
直訳：太郎が弁当を食べることを忘れた

¹ なお、本稿における例文中の略記は以下の通りである（Rel. = Relative, NMNZ. = Nominalizer, Nom = Nominative, Acc = Accusative, Decl. = Declarative）。

(5b) では、(5a) に示すように、日本語で「食べ忘れた」と表される統語的複合動詞が、「먹는것을잊었다(直訳：食べることを忘れた)」というように V1 を名詞化させて表現することが示されている。

日本語において統語的複合動詞を用いて表現する事象を、韓国語で同じように複合動詞で表せられないのは、V2 が「잊는다(忘れる)」の場合だけではない。「끝마친다(終わる/終える)」や「계속한다(続ける/続く)」の場合も同様である。韓国語では、(6b) と (7b) に示すように、「다(全て)」や「계속(続けて)」が、副詞のような役割を担い、本動詞を修飾する。

(6) a. 太郎が弁当を食べ終えた。

- b. 다로가 도시락을 다 먹었다.
Taro-ka tosilak-ul ta mek-ess-ta
T-Nom lunchbox-Acc all eat-Past-Decl.
直訳：太郎が弁当を全て食べた。

(7) a. 太郎が弁当を食べ続けた。

- b. 다로가 도시락을 계속 먹었다
Taro-ka tosilak-ul kyeysoek mek-ess-ta
T-Nom lunchbox-Acc successively eat-Past-Decl.
直訳：太郎が弁当を続けて食べた。

(6b) では、日本語で「食べ終えた」と表現される事象が、「全て食べた」というように表現されることで、「食べ終えた」と似た事象を表すことが示されている。また、(7b) に示すように、韓国語では日本語の「食べ続けた」を複合動詞では表現できない。そのため、別の言い方として、「続けて食べた」というように、「続けて(계속)」を使用する。そうすることで日本語における「食べ続けた」と似た事象を表す。

このように、韓国語には V2 が直接 V1 と併合している点で日本語と似た特性を示す語彙的複合動詞はある（和田 2011 等）が、統語的複合動詞はほとんどない（塚本 2012 等）。日本語で統語的複合動詞によって表される事象は、韓国語では（5b）に示したように、V1 を名詞化させたり、（6b）と（7b）に示したように、副詞を用いて本動詞が表わす事象を修飾させたりする。そうすることで、日本語において統語的複合動詞で表現される事象と似た事象を表わす。

以上に示すように、日本語と韓国語では事象の表し方が形態的に異なっている。では、複合動詞の語形成方法が、塚本（2012）が示したように、韓国語で日本語の統語的複合動詞を同じ語形成方法で表すことができないのであれば、韓国語を母語とする日本語学習者は日本語の統語的複合動詞を習得するのが困難なのであろうか。本稿ではその問いについて調査を行う。

次節では調査結果を報告する前に、まず日本語の統語的複合動詞を日本語学習者がどのように習得するのかを研究した陳（2010）と白（2005）の先行研究を概観する。その後、第二言語習得理論の視点からの本研究の研究課題を提示する。

3. 統語的複合動詞に関する第二言語習得研究

本節では、日本語の統語的複合動詞に関する第二言語習得研究の先行研究として陳（2010）及び白（2005）について概観する。陳（2010）は、発話コーパスを基に、中国語を母語とする日本語学習者が（8）に示すように、日本語の統語的複合動詞の V2 の他動詞を自動詞で表現することを観察している。

- (8) a. 吸い始まる
- b. 笑い始まる

（8）に示した複合動詞は日本語で非文である。複合動詞を形成するとき、V2

が「始まる」のものは偶然の空白 (accidental gap) により日本語の複合動詞には存在せず、起動相を表すためには「始める」を用いなくてはならないためである。

更に、白 (2005) は、統語的複合動詞の V2 が「～出す」であるものが「物を外に移動させる」意ではなく、「～し始める」という起動相の意を表しうることを、韓国語を母語とする日本語学習者が正しく理解しているかどうかを検討している。その結果、白 (2005) は、韓国語を母語とする日本語学習者は V2 が「出す」である統語的複合動詞が起動相を表すことを正しく理解していたと報告している。

これらの先行研究のように、日本語の統語的複合動詞の習得研究は、コーパスを用いた実証研究や V2 が「出す」のものというように、ある特定の V2 の習得研究に限定されており、第二言語習得理論、具体的には言語間の影響や転移に関する観点から系統だった形での実証研究がまだ成されていないのが実状である。とりわけ、韓国語と日本語における複合動詞に関しては、それらの語形成方法の異同に基づく第二言語習得研究が十分に行われていると言い難い。本稿では膠着語という点で共通している韓国語と日本語に研究対象を絞って調査を実施する。

次節では、日本語の複合動詞に関する先行研究 (影山 1993, 2013, Saito 2013 等) 及び韓国語の複合動詞に関する先行研究 (塚本 2012, 和田 2011 等) と日本語の統語的複合動詞に関する第二言語習得研究 (陳 2010, 白 2005 等) を結びつけることで導かれる研究課題を提示する。

4. 研究課題

本稿では、以下の二点を研究課題とする。

- (9) a. 韓国語には統語的複合動詞がほとんどないため、韓国語を母語とする

日本語学習者は産出課題や理解課題において、(5b) のように V1 を名詞化させたり、(6b) と (7b) のように副詞を使用したりすることを好む傾向が観察されるのか。

- b. 陳（2010）が調査した中国語を母語とする日本語学習者と同じように、韓国語を母語とする日本語学習者においても、統語的複合動詞における自動詞と他動詞の誤用が観察されるのか。

(9) を明らかにするために、クローズタスクと文法性判断タスクを使用した実証研究を行った。5 節ではその結果を報告する。

5. 調査

5.1. 被験者

九州の大学に在籍する韓国語を母語とする日本語学習者 32 名と統制群としての日本語母語話者 21 名の計 53 名の被験者が参加した。習熟度テストの結果を基に、韓国語を母語とする日本語学習者を上位グループ（ $n=17$ ）と下位グループ（ $n=15$ ）とに分けた（ $p<.001^*$ ）。

表 1：習熟度テストの結果

グループ	Mean	SD
上位グループ（ $n=17$ ）	11.76	0.73
下位グループ（ $n=15$ ）	7.47	2.39

5.2. 調査項目

5.2.1. 自他の区別に関するテスト

今回の調査で中心的なタスクはクローズテストと文法性判断タスクである。それらの導入にあたり「自他の区別に関するテスト」も併せて実施した。その理由は「複合動詞を正しく作り出し、文を完成させられるか」という問いに答

える上で、次に示す2つの前提を調査しておく必要があるからである。1つ目は、複合動詞の自他の区別に関する議論よりも前に、単純動詞の自動詞と他動詞の区別ができているかどうかという点である。2つ目は、格助詞と自動詞ないし他動詞を正しく組み合わせることができるかどうかという点である。その理由は産出データにおいて複合動詞の語形成に関して何らかの誤用が観察された場合にこの点を明確にしておかなければ、その誤用の原因が何に起因するのか明らかにすることが困難なためである。例えば、(10)の例のような動詞の自他の区別に関するテストで「英語の勉強を続いた」と回答したとすると、そのデータを解釈する上で、もし上に記した事前調査を行っていなかったら、自他の形を認識できていないのか、格助詞を間違っているのかの判断が難しいのである。

(10) ()に入る適切な語を1つ選び、○をつけなさい。

1. 英語の勉強を (続いた/続けた)
2. 英語の勉強が (続いた/続けた)

5.2.2. クローズテスト

クローズテストは(11)のように動詞を選んで複合動詞を作る形式である。この課題で被験者に求められることは、単に2つの動詞を選択することではなく、V1を連用形語幹にし、主語や目的語に付加した格助詞にあわせて、V2の自他を選択することである。つまり、この課題を通して調べたいことは被験者が正しく動詞を選択した上で、適切な形に直して複合動詞を作ることができるかどうかということである。

(11) 3つの動詞から2つ選び、適切な形に直しなさい。

(続ける/食べる/続く) → 私はお菓子を ()。

5.2.3. 文法性判断タスク

文法性判断タスクには4段階の尺度（完全に間違っている/多分間違っている/多分正しい/完全に正しい）を使用した。また、錯乱肢（distracter）を含めて、それらをランダムにシャッフルして提示し、被験者にその文がどの程度正しいのかを判断させた。更に、被験者の判断における振る舞いの違いが、前項動詞と後項動詞のどちらに起因しているのかを特定するために、前項動詞はすべて「食べる」に統一した。そうすることで、被験者の判断の振る舞いの違いに、前項動詞は影響を与えないようにした。変数は以下に示す4タイプの各動詞2つずつとその派生（名詞化/複合動詞）である。それぞれの例を（12）から（15）に示す。

（12）韓国語において V1 の名詞化可能：

（例）「忘れる」、「止める」

- a. キムが1人だけ弁当を食べることを忘れた。（名詞化）
- b. キムが1人だけ弁当を食べ忘れた。（複合動詞）

（13）韓国語において V1 の名詞化不可能：

（例）「終える」、「続ける」

- a. キムはお肌のために毎朝ヨーグルトを食べることを続けた。（名詞化）
- b. キムはお肌のために毎朝ヨーグルトを食べ続けた。（複合動詞）

（14）日本語において V2 が本来の意味無し：

（例）「過ぎる」、「かける」

- a. *キムは夕べの飲み会でご飯を食べることを過ぎた。（名詞化）
- b. キムは夕べの飲み会でご飯を食べ過ぎた。（複合動詞）

(15) 日本語において V2 が本来の意味有り：

(例) 「続く」、「止む」

a. *キムはお肌のためにヨーグルトを食べることを続いた。 (名詞化)

b. *キムはお肌のためにヨーグルトを食べ続いた。 (複合動詞)

まず (12) の「韓国語において V1 の名詞化可能」とは日本語では統語的複合動詞で表現できる事象が、韓国語では V1 の名詞化で代用されるもののことである。(13) の「名詞化不可」とは日本語でも韓国語でも名詞化での代用ができないものである。(14) の「日本語において V2 が本来の意味無し」は V2 が本来の意味を持たず何らかの aspekto を表すものである。また、(15) の「日本語において V2 が本来の意味有り」とは、日本語において後項動詞が本動詞としての意味を持つもののことである。以上の 4 タイプの動詞群がそれぞれ名詞化と複合動詞の 2 種類の派生形で提示された。

6. 結果

6.1. 自他の区別に関するテスト及びクローズテスト

クローズテストの結果は (16) に示された通りである。

表 2：産出課題の結果

グループ	誤用産出者数	延べ誤用数
上位グループ (n=17)	3 / 17 (18%)	5
下位グループ (n=15)	6 / 15 (40%)	7

全体として、誤用産出者の総数は上位グループが 17 名中 3 名、下位グループが 15 名中 6 名であり、下位グループが上位グループを上回る結果が得られた。

今回観察された誤用は 2 種類に分類される。1 つ目は「母語の影響」である。例えば、(7a) に示したように、日本語で「ケーキを食べ続けた」と産出すべ

きところを、「ケーキを続けて食った」と産出した下位グループの被験者が1名観察された。これは「続けて」を副詞のように用いていると推測されるため、(7b)で示したような、母語である韓国語の影響であると考えられる。この結果は、学習理論で定義される「転移」の役割を用いても説明が可能だと考えられる。転移とは人間が新しい知識や情報に直面した際、これまでの経験に基づく情報を参照する行動のことである。こうした行動は第二言語習得においても例外なく観察され、目標言語の知識が乏しい初級の学習者ほど、一般化の拠り所として母語の影響が出やすい傾向が見られる。

また、今回観察された2つ目の誤用は、陳（2010）でも報告されていた後項動詞の自他の誤用である。5.2.1の自他の区別のテスト（例：英語の勉強を（続いた/続けた））において正しく回答できた被験者でも、(16)に示すように、統語的複合動詞のV2の自他に関して他動詞を自動詞として産出する傾向が観察された²。

(16) a. *私はお菓子を食べ続いた。

b. *私はケーキを食べ止んだ。

なお、自他の区別に関するテストにおいて正しく回答できなかった被験者は上位グループが1名、下位グループが3名であった。つまり、32名の被験者の内、4名が統語的複合動詞を正しく産出できないだけでなく、V2における自他をも誤用した。もちろん、その逆、要するに、自他の区別のテストにおいて統語的複合動詞の自他の区別ができず、産出タスクで複合動詞を作ることができる被験者は1名もいなかった。以上のことから、得られたデータを読み解く

² 他動詞を自動詞として誤用した訳であるが、興味深いことに、自動詞を他動詞として誤用する現象は観察されなかった。なぜ自動詞を他動詞として誤用する現象が観察されないのかという問いに関しては今後の研究課題である。

限り、単純動詞の自他を誤ると、統語的複合動詞における V2 の自他を誤る傾向があると考えられる。そのことを考慮すると、そこには何らかの発達順序、例えば単純動詞から複合動詞へといった順序がある可能性が示唆される³。

6.2. 文法性判断タスク

次に文法性判断タスクの実験結果について検討する。結果分析の際、回答に用いられた4段階の尺度（完全に間違っている/多分間違っている/多分正しい/完全に正しい）を、すべて均等に2ずつの差になるように、それぞれ-3, -1, +1, +3と数値化して処理を行った⁴。図1はそれぞれ上位グループ、下位グループ、統制群における文法性判断タスクの動詞群毎の平均値を表しており、(12)から(15)の2つの派生のうちの「V1を名詞化した文（例：食べることを忘れた）」の結果を示している。

³ だが、これを立証するためには、今後、通言語的に調査する必要がある。

⁴ 言語直感を数値化することに関しては、様々な問題点も指摘されているが、「統計処理が可能になり、より客観的で説得力のあるデータ提示が可能になる」（白畑 他 2010：234）の主張のように、利点は大きいと考える。なお、実際の調査に際しても被験者に数値付きスケールを提示の上で入念な説明を行い、手法への十分な理解を確認した上で、実験を実施している。

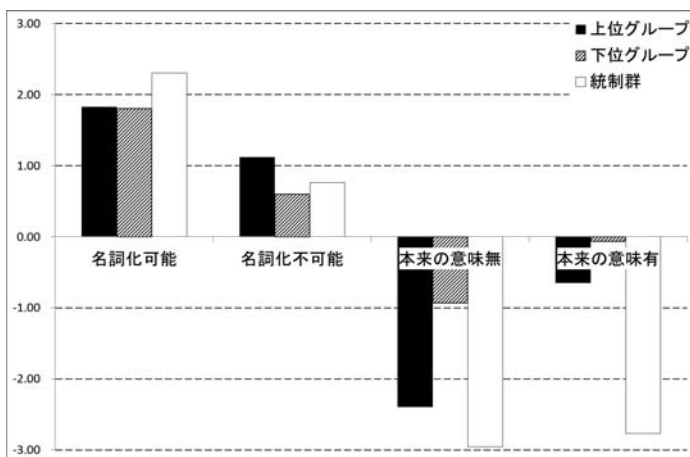


図 1：文法性判断タスクの平均値（名詞化）

表 3：文法性判断タスクの平均値（名詞化）

	名詞化可能	名詞化不可能	本来の意味無	本来の意味有
上位グループ	1.82	1.12	-2.39	-0.65
下位グループ	1.80	0.60	-0.93	-0.07
統制群	2.30	0.76	-2.95	-2.77

今回のデータ分析に際し、「正規性の検定」を実施したところ、「全ての従属変数が正規分布している訳ではない」という結果が得られた。そのため、今回は一元配置の分散分析ではなく、ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis の検定を採用して分析を進めた。

まず「韓国語で名詞化可能」「韓国語で名詞化不可能」のカテゴリーから考察していく。数値自体に多少の差はあるものの、図 1 の結果で最も顕著な点は、上位グループ、下位グループ統制群の 3 グループ間で非常に似た傾向が見られたことである。Kruskal-Wallis の検定においても、3 グループ間の有意確率は、名詞化可能 ($p < .251$)、名詞化不可能 ($p < .519$) と有意差は見られなかった。

つまり、この結果から言えることは、上位グループと下位グループに共通して、母語である韓国語において名詞化が可能であるか不可能であるかという特徴とは無関係に「V1 の名詞化」という選択肢を容認する傾向が見られたということである。しかし、こうした傾向は見られたものの、実際に検定にかけてみると下位グループにおいて「名詞化可能」のカテゴリーと「名詞化不可能」のカテゴリーとの間で有意差が見られた ($p < .018^*$)。つまり下位グループは「名詞化可能」と「名詞化不可能」の2つのカテゴリー同士を区別していると言える⁵。

次に「本来の意味無」、「本来の意味有」のカテゴリーについて考察する。まず「本来の意味無」に関して3グループ内に有意差が見られた ($p < .000^*$)。その後の「Group のペアごとの比較」では上位グループと統制群との間では有意差は見られなかったものの ($p < .054$)、下位グループと統制群との間 ($p < .000^*$)、上位グループと統制群との間で有意差が見られた ($p < .004^*$)。つまり下位グループは上位グループや統制群とは異なるパフォーマンスを示したということで、大変興味深い結果が得られた。

また「本来の意味有」のカテゴリーに関しても、「本来の意味無」と同様に、3グループ間で有意差が観察された ($p < .000^*$)。その後の「Group のペアごとの比較」では上位グループと下位グループとの間で有意差は見られなかったものの ($p < .079$)、上位グループと統制群との間 ($p < .005^*$)、下位グループと統制群との間で有意差が見られた ($p < .0001$)。つまり「本来の意味無」のカテゴリーで観察された以上に統制群と学習者グループ間の傾向の違いが観察され、非文を学習者グループが排除できないことを示した。

次に図2の複合動詞における文法性判断タスクの結果の検討に移る。図2は

⁵ 名詞化可能と名詞化不可能のカテゴリー間で区別する傾向が、日本語母語話者の統制群にまで観察された事実は予測に反する結果であった。具体的に述べると、日本語母語話者の統制群の結果において、「食べることを忘れた」と「食べることを続けた」の間で容認度に有意差が出た。この点に関しては今後さらなる調査が必要であると思われる。

「複合動詞を用いた文（例：弁当を食べ忘れた）」の結果を表している。まず、「韓国語で名詞化可能複合動詞」と「韓国語で名詞化不可能複合動詞」のカテゴリーの結果について見ていくことにする。まず特に顕著だった点は、両カテゴリー間で、全く対照的な傾向が観察された点である。つまり、Kruskal-Wallisの検定にかけると、「名詞化可能複合動詞」に関して3グループ間の有意差は全く見られなかったが（ $p < .670$ ）、他方「名詞化不可能複合動詞」に関しては3グループ間で有意差が見られた（ $p < .000^*$ ）。また、「名詞化不可能複合動詞」における、「Group のペアごとの比較」では学習者グループ間、つまり上位グループと下位グループとの間では有意差は見られなかったものの（ $p < .079$ ）、上位グループと統制群との間（ $p < .005^*$ ）、下位グループと統制群との間では有意差が見られた（ $p < .000^*$ ）。

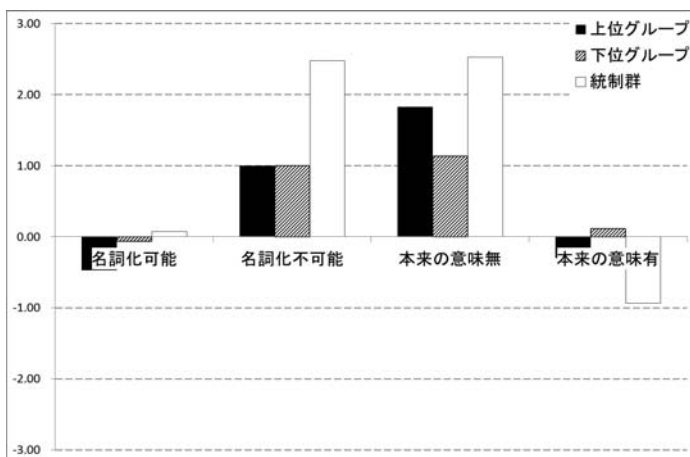


図2：文法性判断タスクの平均値（複合動詞）

表 4：文法性判断タスクの平均値（複合動詞）

	名詞化可能	名詞化不可能	本来の意味無	本来の意味有
上位グループ	-0.47	1.00	1.82	-0.29
下位グループ	-0.07	1.00	1.13	0.11
統制群	0.07	2.48	2.52	-0.94

ここで興味深いのは、上位グループと統制群が共に、「韓国語で名詞化可能」と「韓国語で名詞化不可能」のカテゴリー同士を区別する傾向を示したことである。これらのカテゴリーの違いは実際には、(12) や (13) の例（食べ忘れた、食べ続けた）に示されるように、日本語では共に容認されると予測される。ところが Kruskal-Wallis の検定でこれらのカテゴリー間で有意差が見られた（上位グループ： $p<.019^*$ ，統制群： $p<.000^*$ ）⁶。

最後に、「本来の意味無しの複合動詞」、「本来の意味有りの複合動詞」のカテゴリーについて検討する。「本来の意味無しの複合動詞」は (14) に示したように、V2 が本来の意味を持たず何らかのアスペクトを表すものであり（例：ご飯を食べ過ぎた）、3 グループとも問題なく受容できていた。次に「本来の意味有」は、(15) に示したように、V2 における動詞の自他を誤用した文（例：ヨーグルトを食べ続いた）を提示し、日本語の文法では容認しないと判断できるかを調査したものである。まず、「本来の意味無しの複合動詞」に関する Kruskal-Wallis の検定において、3 グループ間で、有意差が見られた（ $p<.001^*$ ）。その後の「Group のペアごとの比較」では上位グループと統制群との間（ $p<.066$ ）、上位グループと下位グループとの間では有意差が見られなかったものの（ $p<.451$ ）、下位グループと統制群との間では有意差が見られた（ $p<.001^*$ ）。

次に「本来の意味有りの複合動詞」に関して、検定で 3 グループ間に有意差

⁶ なお下位グループにおいては、両カテゴリー間で有意差は見られなかった（下位グループ： $p<.096$ ）。

が見られた ($p < .001^*$)。その後の「Group のペアごとの比較」では上位グループと下位グループとの間では有意差が見られなかったものの ($p < .079$)、上位グループと統制群との間 ($p < .005^*$)、下位グループと統制群との間で有意差が見られた ($p < .000^*$)。しかし、「本来の意味有」のカテゴリーでは、上位グループ、下位グループ共に明確に排除できたとは言えない結果が得られた（上位グループ：平均値 = -0.29 ，下位グループ：平均値 = 0.11 ）。しかしながら、Kruskal-Wallis の検定で上位グループにおいてこれらのカテゴリー間で有意差が見られ ($p < .000^*$)、上位グループがこれらの複合動詞のカテゴリーを明確に区別していることが観察された。

7. 研究課題と考察

本節ではクローズタスクと文法性判断タスクの結果を統合して導かれる考察を行う。まず、研究課題を以下に再掲する。

- (17) a. 韓国語には統語的複合動詞がほとんどないため、韓国語を母語とする日本語学習者は産出課題や理解課題において、(5b) のように V1 を名詞化させたり、(6b) と (7b) のように副詞を使用したりすることを好む傾向が観察されるのか。
- b. 陳 (2010) が調査した中国語を母語とする日本語学習者と同じように、韓国語を母語とする日本語学習者においても、統語的複合動詞における自動詞と他動詞の誤用が観察されるのか。

(17a) における「(5b) のように V1 を名詞化する現象が見られるか」という問いに関しては、大変興味深い結果が得られた。上位グループ、下位グループの被験者において、韓国語で V1 を名詞化できるものに関しては、複合動詞よりも名詞化の方を好む傾向が観察されたのである。それは図 1 と図 2 の結果を

比較すると明確に現れている。つまり名詞化可能なカテゴリーにおいては上位グループ、下位グループ共に図2の複合動詞よりも図1の名詞化をより好む傾向が見られた（上位グループ：平均値=1.82，下位グループ：平均値=1.80）。更には下位グループにおいて、V1が名詞化した文に関する結果でも名詞化可能と名詞化が不可能な項目の間で容認度に有意差が生じた（ $p < .018^*$ ）。つまり、韓国語を母語とする日本語学習者の文判断においても、母語である韓国語で名詞化が可能な項目と不可能な項目とを明確に区別しようとしていることが判明した。

同様に、複合動詞を用いた文に関しても類似した傾向が見られ、韓国語で名詞化が可能な項目と不可能な項目を区別する傾向が見られた。更には、図1と図2とを比較すると、韓国語で名詞化が許されない項目に関しては、名詞化ではなく、積極的に複合動詞を容認しており、上述の(17a)で挙げた問いへの否定的な結果が得られた。

また、(17a)における「(6b)と(7b)のように副詞を使用する現象が観察されるか」という問いに関しては、クローズタスクにおいて興味深い現象が見られた。「私はお菓子を続けて食べた」という文における「続けて」のように、副詞を使用した例である。特にこの母語の影響が観察されたのが下位グループであったことから、「熟達度 (proficiency)」と「母語の影響」との関係において認識されている、目標言語の知識が乏しい初級の学習者ほど、母語の影響が出やすいという傾向が観察されたと考えられる。

次に(17b)の課題に関して考察する。クローズテストの結果において「私はケーキを食べ止んだ」という誤用が上位グループと下位グループ共に観察された。また、同時に実施された自他の区別に関するテスト結果を見てみると、単純動詞として「止む/止める」が提示された場合も、上位グループと下位グループともに「英語の勉強を止んだ」や「雨が止めた」などの誤りが観察された。これらの結果から、陳(2010)による中国語を母語とする日本語学習者の

統語的複合動詞の V2 の誤用に関する報告は、本研究の韓国語を母語とする日本語学習者にも共通する問題であることが判明したと言える。また、文法性判断タスクの結果においても「ヨーグルトを食べ続いた」のような自動詞と他動詞が誤った文を提示したところ、特に下位グループはこれを排除できなかった。この結果はクローズタスクで観察された結果、つまり他動詞を自動詞として産出する誤りを確認付けるものであると考えられる⁷。

以上、それぞれ 2 つの研究課題に関する結果を考察してきた。調査項目に関する被験者の振る舞いを細かく分析し、鮮明になった点は、陳（2010）で報告されていた統語的複合動詞における V2 の自他の誤用は複合動詞の習得の問題という以前に自他の区別ができていないことに起因するのではないかということである。しかも今回の習熟度の低い下位グループに多く観察されたことから、これらは発達段階における習得順序への示唆を含んでいると考えられるが、今回の調査は被験者の数が十分とは言えないため、さらに多くの被験者での再調査を行い、この点を検証していく必要がある。

8. 今後の課題

最後に今後の課題を 2 点挙げて締めくくりにする。まず 1 点目の課題は前節でも言及した第二言語習得を取り巻く様々な要因も考慮に入れた形での調査を実施することである。教室環境や複数の教科書における複合動詞の扱いについて詳しく調査し、入力の種類や種類といったインプットの視点も含めた上での研究計画を練る必要がある。

⁷ ここでくれぐれも慎重になるべき点は、文法性判断タスクの特性に関わる問題である。つまり学習者の言語使用（performance）や行動を反映している産出タスクと異なり、文法性判断タスクで問われるのは、主に学習者の対象文法に関する知識（メタ言語知識）である。これには教室での文法指導を含む学習者のこれまでの学習履歴及び受けたインプットが大きく関わってくる。そこで上位グループが下位グループよりも、より正確に排除できた理由をより明確に把握するためには、こうした言語的知識を教室で入手できたことに起因しているのかどうかを遡って調査する必要があると言えるだろう。

2点目の課題は、記述の域を少しでも脱却し、「母語の影響」を含めた第二言語習得理論の構築に少しでも寄与していくことである。そのためには、今回対象とした韓国語以外の他の言語話者も対象に含めた形での調査が必要だと考える。そこから得られたデータを比較検討することで、今回見られた結果が韓国語を母語とする日本語学習者特有のものであるのか、あるいは他の言語の母語話者にも共通して見られるものなのかといった点を解明することができる。

こうした研究の拡がりには第二言語習得における困難点や母語の影響を受けやすい項目が明らかにすることにもつながり、ひいては教室における指導といった言語教育の分野にも大いに貢献すると考えられる。

謝辞

言語学会第16回国際年次大会での口頭発表時また準備の段階で貴重なコメントをいただいた、白井恭弘氏、平川眞規子氏、澤崎宏一氏、ならびに調査にご協力いただいた九州大学韓国研究センターのスタッフ及び被験者の皆様にこの場をお借りして、感謝の意を表する。

本研究は、文部科学省の科学研究費 24520684（基盤研究（C））の助成を受けて行われている。

参考文献

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房，東京。
- 影山太郎（2013）「語彙的複合動詞の新体系」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』3-46，ひつじ書房，東京。
- 白畑知彦，若林茂則，村野井仁（2010）『詳説 第二言語習得研究 理論から研究法まで』研究社，東京。
- 陳曦（2010）「第二言語としての二種類の複合動詞の習得—コーパスによる学習者の使用実態をもとに—」『ことばの科学』23号，19-35。

- 塚本秀樹（2012）『形態論と統語論の相互作用—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』
ひつじ書房，東京。
- 白以然（2005）「複合動詞「～出す」・「～始める」の習得—韓国語を母語とする学習者の意識を中心に—」『人間文化論叢』8号，307－315。
- 和田学（2011）「二つの語彙的緊密性—韓国語（と日本語）の複合動詞—」『山口大学文学会志』61巻，83－104。
- Huang, C.-T. James（1992）Complex Predicates in Control. In Richard K. Larson, et al. (eds.) *Control and Grammar*, 109－147. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Saito, M.(2013) Conditions on Japanese Phrase Structure : From Morphology to Pragmatics. *Nanzan Linguistics* 9, 119－145.